

往来と交差のまち



注目度が高まる北千住駅西口エリア

北千住駅西口の風景を一言で表すなら「カオス」だ。北側にはルミネ、マルイなどの巨大駅ビルがそびえる。かと思えば、南側には路地が入り組み、昔ながらの飲み屋がひしめく。荒川のほとりで老若男女が行き交うこのまちは、多様な人々の暮らしと文化が混ざり合う「ごった煮」の様相を呈している。

近

年は東京芸術大学や帝京科学大学などのキャンパス誘致に加え、JR線や東京メトロ、つくばエクスプレスが乗り入れる交通利便性が追い風となり、「住みたい街ランキング」の常連となった。2025年度之路線価も前年度からの上昇率で都内第2位を記録するなど、高まる人気は数字にも表れている。そして、このにぎわいを背景に新たな再開発計画が浮上している。

歴史や文化、そして実際に暮らす人々の声を手がかりに、熱烈な視線が注がれる北千住駅西口の魅力をひもときながら、足元で進行する再開発計画も踏まえ、このまちのアイデンティティを次世代へつなぐまちづくりを考察する。

発展の背景に 隅田川あり

現在の北千住駅周辺は、江戸時代に宿場町「千住宿」として栄えた歴史がある。25年に開港400年を迎えたこの一大拠点の形成について「隅田川」の存在が大きかった」と話すのは、文教大学国際学部で文化経済学、地域経済学などを研究する清水麻帆教授だ。

当時は現在のように整備された荒川はなく、近くを流れる隅田川が物流の大動脈だった。千

あなたが 動かす まちづくり



— 北千住駅西口編（上） —

住は荷積み・荷下ろしの拠点として機能し、野菜などが卸される千住青物市場には、「投師（なげし）」と呼ばれるプロのバイヤーが集結した。ここで取引された品が各地に運ばれていたという。

その立地的優位性は、人の往来も活発にした。行楽地であり、江戸の玄関口でもあった千住宿は、江戸四宿（千住宿、品川宿、板橋宿、内藤新宿）でも最大規模のにぎわいをみせた。江戸中心部からも徒歩でたどり着ける距離にあることや、隅田川に架かる千住大橋が北方から江戸へ入る唯一の橋だったことも、その背景にある。

このように人と物が関わり合う過程で、多様な情報が行き交い、独自の文化が発展した。その最たる例が、1815年などに開かれた『千住酒合戦』である。千住の飛脚問屋の主人が喜寿を迎えたことを祝う催しとして、各地から集まった100人の参加者が酒の飲み比べ大会に



モトハラの関根代表



角打ちモトハラの内観

唯一無二の宿場町が育んだ独自の文化

興じた。その中には、同時期に活躍した絵師の酒井抱一（さかいほういつ）や、儒者の亀田鵬斎（かめだほうさい）、狂歌師の大田南畝（おおたなんぼ）といった文化人も名を連ねたとされる。宿場町で成り上がった豪商、近隣から訪れた庶民、偶然宿泊していた旅人まで、地位や身分を超えて酒の席を囲んだという。

現在も北千住に漂う「カオス」な空気感は、他者との壁を乗り越えて場と時間を共有してきた歴史の延長線上にあるのかもしれない。

令和によりがえった 千住酒合戦

この「千住酒合戦」が、地元根ざした酒屋の協力で一日限りの復活を果たした。2025年11月上旬に東京芸術センター前で開かれた「千住酒祭り」である。主催したのは、北千住に店舗を構え、関東圏を中心に卸売りも展開する「モトハラ」。代表の関根豊明さんの呼び掛けで、北は青森、南は山口までの酒蔵が一堂に会し、行き交う人々に日本酒などをふるまった。区内外を問わず、昼間から酒をたしなむ人々。約200年前にも、似た光景が広がっていたと想像される。

関根さんはこの地に45年以上暮らす「北千住ローカル」だ。入り組んだ路地裏に小さな店が密集していることを「北千住の良さ」だと語る。「お酒を通じて地域を活性化したい」とイベント開催に一肌脱いだという。同社は今回のイベントに限らず、酒を通じた場づくりに取り組んでいる。北千住駅西口から西へ徒歩約15分にある店舗の近くに「角打（かくうち）モトハラ」を構え、毎週土曜日の午後には、大きな一枚板のテーブルを置き、日本酒の量り売りや、普段はお目にかかれない銘柄の試飲も用意している。夕方になると遠方から訪れた客も加わり、店内はごったがえすという。関根さんは「お酒そのものよりも『空間』を大切にしたい。雰囲気良く飲んでもらえれば」と話し、江戸時代から根づく酒の文化を通じた場づくりに強いこだわりを見せた。



千住酒祭りには昼間から多くの人が来場した

